

LAMPIRAN



Cover Album *Hyakki Kenran*

契 *Chigiri*

はら はら はらり 粉雪が舞う 渦巻いた 因果律は
ゆら ゆら ゆらり 心は揺れる 燈を散し 儂と燃ゆ

嵩ね合わせた左の手右の手掌に 其方への この想い 一露とて
流れ出る 紅の色は 零さずに
白に華を添える 幽音も無く 奥の奥まで呑み干しましょう

現世に誑され縛れあう糸よ 悲恋故昇華する刹那の瞬き
解れずに絡みあえ永遠の時を 灰になれ塵になれ輝きを湛え

くら くら くらり 景色が歪む 現世に誑され縛れあう糸よ
ふら ふら ふらり 意識は遠退 解れずに絡みあえ永遠に離れぬよ
いてく うに

見詰め合わせた左の眼右の眼滲む
目眩
浸す闇に 軀を委ねて
淡い息を吐いて 俄に微笑む

現世に誑され縛れあう糸よ
解れずに絡みあえ永遠の時を

隠恋慕 *Kakurenbo*

魅いて惹かれるこの恋は 終わら そう いまもいまも 君を捜す
ない隠れんぼ 抱き締めたくて
君は何処にいるの？ もういいか そう いつもいつも 聴こえない
い・・・？ 鬼さんこちら
もういいよ・・・。

魅いて惹かれるこの恋は 終わら
ない隠れんぼ
君を追いかけて 奈落に墜ち込ん 僕は此処にいるの？ もういいか
だ い・・・？
季節の始め 春の日 返事をして・・・。
目隠しをされて 光を失った
孤独な温もり 夏の日

そう いまもいまも 君を捜す
抱き締めたくて
そう いつもいつも 届かない
君を呼ぶ聲は

君の小さな手が 小指と薬指を
握り締めてた 秋の日
その倅かんだ手が 気付けば離れ
ていた
二度と戻る事のない 冬の日

白ろ嘘 *Shiroi Uso*

風に解けた約束はいつか時を超え そう優しい微笑みで
て また逢えるよと
窓辺から眺める 景色は何時もと 真っ白な嘘を呟く
変わらずに
暦を刻んで 私の鼓動を奪い去る また逢えると言った
そう哀しい微笑みで
遠い遠い彼方を見つめて また逢えるよと
この手を包んで静かに貴女は 透明な嘘を囁く
また逢えると言った 私も同じように 貴女の頬に触れ
そう優しい微笑みで て
また逢えるよと その眼をみつめ 嘘を呟く
真っ白な嘘を呟く 遥か未来へ あの雪よりも雲より
透白な嘘を また逢えるねと
庭先の向日葵 二人愛でた淡い淡
い記憶
憶いだす度に 切なさが胸を締め
付ける
遠い遠い彼方を見つめて
この手を包んで静かに貴女は
また逢えると言った

鬼還 *Kikan*

時は満ちた 風に融け土に溶けて その手を伸ばしたなら
無へ 掬ったならば
灰に染みだ穢れすぎた魂放て
夥しく儂く咲く白菊に 天への階段へと導かれ
その軀を委ねたなら 扉が雲を別けて顕る
浮かべたならば 傷つき傷つけたあの感触も悼みも
黄泉への道標が記された 幻惑がそう
川辺の石音さえ聴こえる 優しく撫でるように包むように忘
れさせるから
流され流れた日々の悔恨も泪も 心よどうか穏やかに 久遠の虚ろ
せせらぎがそう の中で
優しく撫でるように包むように忘 思考の刻みを止めて優しく眼を伏
れさせるから せて
心よどうか穏やかに 久遠の虚ろ 噫 聲が遠い場所で囁いてる
の中で 噫 人は原罪から逃れえぬ
思考の刻みを止めて優しく眼を伏 懺悔など意味も無く故に空しいも
せ のよ
腐敗の大地 暗く濁る澱み逝く晁
生命さえ口を嚙む世界を壊せ 悦楽も歎びも棄てて
華々しい誘惑に満ちた粉に 限りなく溢れる哀しみを抱いて

心よどうか穏やかに 久遠の虚ろ
の中で
思考の刻みを止めて優しく眼を伏
せ
神々よ慈悲の鞭で 解放を与え賜
え
永遠に揺らぐ事の無い眩き境地を

時は満ちた
風に融け土に溶けて無へ
灰に染みた穢れすぎた魂放て



月に斑雲紫陽花に雨 *Tsuki Ni Murakumo Hana Ni Ame*

艶めく月を抱く淡い斑雲
この私も独り薄れ逝く

逸そのまま融けて 無空に消え
たい

五月雨の晁を朦朧と窓越しに視て
瞳を潤わす私は私なのだろうか?
考えるそう肘をつき
眼を閉じて吐息を嚙め

哀しくて、、、もう、、、苦しく
て、、、
只管に頭をかかえ眠る

艶めく月を抱く淡い斑雲
そっと樂へと雪ぐ 霽のように
この私も独り翳り萎れる
逸そのまま融けて 無空に消え
たい

何時からが過去なの?
何時からが未来?
現在此処に居るのは誰でしょう?

卍華鏡みたいな繰返す毎日に倦み
掌のうえの気休めをまた口に含む
時は唯明日を連れ
容赦無い光を浴びせ

艶めく月を抱く淡い斑雲
そっと樂へと雪ぐ 霽のように
この私も独り翳り萎れる
逸そのまま融けて 無空に消え
たい

あの皐月のようにあの紫陽花のよ
うに私も消えたい

艶めく月を抱く淡い斑雲
そっと樂へと雪ぐ 霽のように
この私も独り翳り萎れる

鬼咆 *Kihou*

噫 いま月が消えた

そう いま影は満ちた

意味さえ残さず

愚かな愛は 愚かな希望は

嘲られ踏み躪られて

闘う事も 抗う事さえ

暗闇の彼方に霞む

響けよ哮る怒りよ 颯を纏い

響けよ濡れた叫びよ風雅を帯て

響けよ嘆きの詩よ 雷哮く

響けよ最期の聲よ

何故に 心は碎ける

何故に 無為だと知りつつ 命を

尊ぶ

儂い夢は 儂い想いは

詰られて淘汰されても

誰かを支え 何かを護って

ぽつねんと独りに気付く

響けよ哮る怒りよ 颯を纏い

響けよ濡れた叫びよ風雅を帯て

響けよ嘆きの詩よ 雷哮く

響けよ最期の聲よ

途絶えた路は 途絶えた言葉は

風化して塵へと貌わり

産まれた過去も 死したる未来も

極自然に忘れ去られて逝く

響けよ哮る怒りよ 颯を纏い

響けよ濡れた叫びよ風雅を帯て

響けよ嘆きの詩よ 雷哮く

響けよ最期の聲よ

魔夏の世の夢 *Manatsu No Yo No Yume*

夏の夜の夢現

廻れよ 廻れ 廻れ 唄声を轟か 伽藍堂の幻に
せ 狂えや 狂え 狂え 髑髏も歯嚙
ららるら るらら 踊り明かそう みして
ららら るららら

月輪に燈を灯し
游べや 游べ 游べ 手を繋ぎ足 然うよ彼の夜は未開の土地
揃え 朽ちるなら 果てるなら 世界を
ららら るららら 壊して

然うよ此の世は刹那の刻 白夜を駆ける虎になれ
終わるなら 消えるなら 嗤って 白く白く染まれ
羽撃け 永劫燃える鳥になれ

闇夜を跳ねる蝶になれ 大河の龍になれ
白く白く染まれ 青く蒼く染まれ
煌めく粉を従えて 富嶽を揺らす亀になれ
赤く紅く花火のように 黒く黒く金剛石のように

幽く華になれ
青く蒼く染まれ 燃えるなら 爆ぜるなら
燐光をその軀に羽織り 微塵も残さず
黒く黒く金剛石のように

闇夜を跳ねる蝶になれ

白く白く染まれ

煌めく粉を従えて

赤く紅く花火のように

幽く華になれ

青く蒼く染まれ

燐光をその軀に羽織り

黒く黒く染まれ

四神の背に跨りて 荒く荒く唸れ

天鵞絨の衣を纏い

白く赤く青く黒く銀に金に美麗に

舞え





四季 Shiki

噫 風に吹かれ舞い散る桜は
何故この心に侘しさを説くのだろう
人は時を泳ぐたびに 何かを失くしてゆく
水面に揺れる木葉のように 流れて流され消え逝く
愛しくて愛しくて心から
言葉みつからぬほどに貴女への想いよ
永遠に四季は廻り巡る

噫 影を宿す母なる光に
何故この心は漕と泣くのだろう
人は掌を合わせて明日を願い祈る
けれど私の両の指は貴女を求めて彷徨う
愛しくて愛しくて心から
言葉みつからぬほどに貴女への想いよ
永遠に四季は廻り巡る

春過ぎて夏来にけらし
秋が降り冬が芽吹く

愛しくて愛しくて刹那くて涙溢れ出すほどに
悠久の誓いとともには咲き四季を跨ぎ
愛しくて愛しくて心から
言葉みつからぬほどに貴女への想いよ
永遠に

